

教育と旅

—— フィールドワーク F (カナダ研修) の体験から ——

池田肇子

1. はじめに

今年度初めての試みとして現代文化演習にフィールドワークを並置し、文学作品の舞台となった現地を訪ねる旅を計画した。作品の生まれた背景を観光することにより、より一層の作品理解を目論んだのである。

しかし、いざ募集を始めると元来希望していた学生たちが、諸事情により参加不能となり、さらに応募者が予定催行人数に達しない——学科長のご英断により結局のところ催行決定した——など出発間際まで気を揉んだプランであった。

1年から3年の参加者は、珍しくも一人も筆者の授業を受けたことがないという教師としては試練を予測させるグループであったが、5名という人数はファミリーを想起させる頃合いの少人数であった。実際、学生間の融和ぶりは著しく、互いに諸事情を抱えていることなどオープンに語り合う様を見聞していると、筆者自身の学生時代との較差に驚きを禁じ得なかった。振り返れば、かつての友人とは、いわゆるハダカの付き合いになるまで相当の時間を要したと思う。現代の学生はのっけから自身のプライバシーと思しき身の上を語りつつ、互いの理解を深めて行く。当旅行を引率すべき筆者は、この際傍観者的立場におもしろさを覚え、時にはつい本音を差し挟んだりしながら彼らの会話の運びを楽しんでいた。

彼らの共感を維持しているらしい共通項は、それぞれの家庭にあるフツウではない事情のようなのだ。そこを突き抜けたところで友愛が生まれ、互いに支えあう姿勢ができていく。実際、ある家庭にホームステイした一人の学生が、赤毛のアン・バスツアーに出かける日の朝皆と出会った途端に泣き出すというハプニングがあった。彼女は、前の晩日本から持参していた食材を使って必死になって夕食をこしらえ、ファミリーの方々をもてなしたのだが、帰省中であった同年輩の大学生の娘はあまり手をつけることもなく冷ややかな風でコメントもしなかったそうである。汗だくになって用意した日本食であったから、彼女はすっかり傷ついてしまったのだ。その話を聴いてあげている友人たちの優しさと寛容さを見て、私は大人の出る幕ではない、と感じていた。そして、彼の地の女子学生も今どきの（日本の）若者と同じく、無感動で、よその人に挨拶もろくにできないようだ、と推察した。事情を心配して問い合わせた現地旅行社——ホームステイを斡旋した——のガイドに対して、母親は娘がいつもあんな風で困っているのだということを涙ながらに語ったそうである。しかし、若者たちのコミュニケーションはその後すぐに成立した。この困った娘が、ホームパーティーに快く参加してきた、という。それには、話を聴いて慰めていた仲間が加わって日加学生交流が始まり、彼らは打ち解けて様々な同世代らしい会話が交わされたためである。その話を聞いた引率者は、手を叩かんばかりに喜び感動したものである。彼らは、「できる」のである。

他日、プリンスエドワードアイランド大学（UPEI）のキャンパス・ツアーでも同じような感慨を持った。筆者のいないところでも、現地の学生たちとしっかり交流していたからである。

今回の研修は、時間・費用等の制限もあり文学研修というよりはむしろ異文化体験という内容になったが、かなり密度の濃い6日間であったと言えよう。彼らが抱えているであろうそれぞれの事情は多分、これからは今までとは違った視点で捉えられるだろうと、妙に確信したからだ。

今夏の体験は、筆者にもあるインスピレーションを授けてくれた。異文化

交流、つまり旅のもたらすものについて、人は何を期待し、何を体得して、心ひそかに再出発を期するのだろうか。観光ブームの今、この問題について教育的観点から通時的に考察してみたい。とは言え、筆者も受けてきた戦後の欧米指向の教育にのみ焦点を当てて論じることになると思われる。さらに、英文科専攻の学生として、ラテン語やフランス語の外国語をはじめ、西洋哲学、（ドイツを主とした）文学概論、英米文学史をはじめとする専攻分野の諸科目を受講しているため、他専攻学科の事情には明らかではないことを断っておかねばならない。

本稿では、第1章で近代教育の意義について通時的に再検討し、第2章で私たちが居合わせている現在の教育現場で起こっていることを直視し、第3章では教育と旅の相関関係を考察することによって、第4章で旅行教育論なる理念から、教育に旅を実践的に活用する意義を追求したい。参考にした文献として、石附 実『教育における比較と旅』（東信堂、2005年）を挙げる。

1. 近代学校のはじまり

黒船の来航により300有余年の眠りから目覚めた日本は、西洋先進国の科学技術を中心とする「文明」のレベルに追いつき追い越すために、政治、経済、社会、教育ほかあらゆる面での極端な合理化と組織化を推進した。その過程では、ひたすら、進歩と競争こそが主要な価値となった。当然、日常生活と結び付く、生き方の総体としての文化から離れて、機械と技術中心の文明への関心が強まり、教育は、文化から離れ、生き方を伝えることよりも、表層的なもの、つまり知識、技術の伝達を重視するようになった。こうして、教育とくに学校教育の隆盛とはうらはらに、文化の衰退が進んだ。

たしかに、一世紀余にわたる日本の近代化は、ある面つまり「文明」においては、大きな成功をおさめた。いまや経済的、技術的には、世界の最も進歩した国の一つとなった。西洋諸国との競争を意識し、進歩の正当性を確信しながら、その目標は、ある程度達成されたのである。

しかし、私たちは、21世紀を迎えて、その近代化の過程で失ってしまったものの大きさに、いま、改めて気づかされ始めている。人間の力を無限と確信し、「人工」を優先させ、自然に対立して、開発という名の環境破壊を生んでしまった。また、進歩を至上とし、競争を過度に重視する人間観や社会像から、さまざまな人間性の喪失や社会的混乱を招く結果となったのである。

石附 実は、これらのことから「近代以後（ポスト・モダン）の時代に生きる、これからの人間にとって、近代（モダン）の時代に失われた歴史的な価値、とりわけ、生き方を伝えるという教育において、とくに必要で、しかも、前近代（プリ・モダン）の時代において日常生活のなかで息づき、教育で重視された、価値に思いを致すことが大切であろう」と示唆する。すなわち、自然との関係や人間相互の間において、人間というものの力の限界を常に意識する慎みや、何らかの絶対的なものへの恐れ（日常生活はもちろん、儀礼やタブー、年中行事などにも表われる）、利己や我がままを抑え、異なる他者をも迎え入れる寛容さや思いやり、などまさに日本の文化における伝統的な価値ともいうべき、精神的な態度を育てていくことが大事であろう、と言う。

ところで、子どもをめぐるさまざまな儀礼や行事があるが、その意味するところは、日本の「子ども尊重」という考え方の表われといえる。16世紀の半ばに日本に初めてやってきた西洋人たち——ザビエルやイエズス会の宣教師たち——以来19世紀に至るまで、多くの外国人たちが、日本の子どもとその養育の文化について、ほぼ共通した観察結果を残している。それは、日本が「子どもの天国（楽園）」であるということである。西洋の子どもたちが近代教育によって奪われてしまった、かつての美点を、日本の子どもたちはもっていること、すなわち、日本の子どもが「自然の子」であることを指摘した外交官もいる。これら「子ども尊重」あるいは「子どもの天国」という見方は、西洋において一般的な「人工的」養育とは異なる、日本の「自然的」な教育の伝統を表現するものである。その「自然的」という特徴は、大人の子どもの対する関係において、西洋や東アジアの国々が、大人を中心とする

文化であるのと対照的に、日本では、むしろ子どもが中心となる文化であると言ってよい特徴があることも関係する。

また、石附は、西洋の育児の伝統的風俗である巻き布と日本のゆったりした産着を比較対照して、育児と養育における、日本の自然的な性格と、西洋の人工的な性格との違いを明らかにしている。

そして、必要なことは、子どもを自然の中で、しかも自然のあり方を大事にする考え方のもとで、養育し教育する、という伝統的な価値を再認識し、それを実現してゆくことである、と決論している。

つぎに、石附は、日本の教育生活についても通時的に俯瞰している。前近代の江戸時代には、三つの種類の学校、すなわち、幕府が建て運営した昌平校、全国の300近くの藩が独自に設立、運営した藩校、そして完全な庶民の学校である寺子屋があった。これらの学校は、共通に、それぞれの個人がしるべき年齢や学習への準備の段階において入学し、在学の期間も、かなり自由に各人が決め、学業のプロセスで相応の効果があつたと判断したら、それで学校生活を終える、というのが一般的な姿であつた。したがって、前近代の学校には、「卒業」という概念はなかつたし、近代学校のように、全員一斉にそろつての入学や卒業もなかつたから、学習プログラムの計画と実践は、あくまで学習者の側にあつた。近代において、学校の側でそれらの全てを決定するというのとは、著しく対照的なのである。

近代においては、学校は、いわば絶対の力をもつものであり、あらゆる教育の場と機能を集中的に独占し、人びとをそこへ「所属させる」ものであり、教育生活は学校側が決定するものとなつた。

ところで、ポスト・モダンの現代における教育について、石附の洞察は興味深い。彼は、ポスト・モダンの時代に入って、教育の広がりや分業化が進み、各個人の教育生活は、各人が自由かつ個性的に設計図を描き、それを実践する段階に移っている、と言う。そこで、学校も、まさに「利用する」便宜的、通過的なものへと変わり、教育の流動化が生じるのである。

石附の結論は、このように、教育の伝統的な価値の中身においても、また、

教育が行なわれる場においても、ポスト・モダンへの展望は、プリ・モダンへの省察から始めるべきだと、主張することにある。その作業こそまさに、生き方の総体としての文化の価値の未来への活性化であるとする。

西洋の近代学校が、本源的には、教会の中から生まれ、宗教と密接不可分な関係のもとに発達したのに対して、日本の近代学校の場合には、文化の啓蒙、より広くは、行政と結びついたものとして出発したと見る石附は、学校が近代化の基点として注目され、活用された事情から、行政側の発想は、学校を通して近代化を推進するものであった、と看破する。明治政府は、学校をパイプとしての近代化という路線で、急速に、しかも大幅に、西洋の先進文明を採り入れ、国家の独立の確保と発展を目ざそうとした。国家による指導と組織化は、たしかに集約的かつ効率的な方策ではあったが、当然そこに、企画化ないし画一化という弊害を伴う。

そのほか、日本人の伝統的な性格特徴の一つとしての、皆が行くから自分も行くといったたぐいの他者志向的な同調性は、個人・集団相互間の競争意識と微妙に結びつき、日本の学校教育の進展はもとより、近代化そのものを推進した陰の力でもあったこと、また、現代における教育過熱の底流にもこの競争と同調性が働いている、と考える。そこから、教育に対して具体的効用性を求める、学校を功利的な観点から見る学校観が生まれてくる。

こうして、行政側からの力と、ひたすらモノ的価値の追求に向かう功利性が結びついて、学校の絶対的な性格が形成され、はなはだしい学校教育万能的な観念も生じた。それゆえ、学校への進学と卒業が、修学の中身の如何とは別に、人間評価の尺度となったり、あるいは、卒業がそのまま資格とも直結されたのである。

3. 現代日本の教育

日本の近代化は、西洋の知識・技術・文物を急速に取り入れ、先進文明のレベルに到達することを目ざす道のりであった、と考える石附は、教育がそ

れを能率的に進めるために動員されたとみる。そして教育は、規格化が優先され、すべては量の規律によって動かされ、多様な個の発育と開花の芽は摘み取られざるをえなかったのであった。

未曾有の発展を遂げてきた現代の日本は、目ざす目標を失ったかのようである。明治以降の近代化の過程では、西洋文明というあるひとつの追いつくべき目標があった。石附は、このことから、これまで他者志向的に設定されていた目標から、いまや自らがその進むべき道とペースを主体的に定めなければならない段階にある、と指摘し、量から質への転換の時期にさしかかっており、モノと技術を優先させるあり方から、人間が個としての尊さと多様性を発揮して生きていくべき時代でもある、と説く。

続けて、石附は、日常生活に結びつく、生き方の総体としての文化そのものがそうであるとともに、究極的には教育のあり方の転換も余儀なくされるであろうとする。そして、個としての人間を育て、自立の個のゆたかな共存の道を求めることが、現代における教育の課題であり、そのためには、近代化の過程において果たしてきた学校教育の規格化と、教育の学校への集中、独占的なあり方への深刻な反省から再出発すべきである、と結論している。

それには、流動化と多元化の進行の著しい現代にあって、教育は、閉ざされ固定的であるのではなく、社会における教育現場の一つとして、分業化の時代に呼応しなければならない。また、それぞれの学校が個性をもった教育を行なうとともに、社会に開かれた、新しい意味における、地域のセンターとしての役割を果たす方向で、そのあり方が考え直されなければならない。開かれた学校から、開かれた個としての人間が育つと述べ、教育と教育現場での一そうの流動化を期待している。つまり、教育を文化の広がりで見え、人間の形成と発展を、学校のみならず学校外のさまざまな場や局面にまで広げ伸ばして、考えることが必要なのである。さらに、世界の諸国・文化ごとの比較という観点から、世界全体の中で、それぞれの独自性や個性をいかに発揮していくか、という、まさに普遍の中に生きうる個性の探求と共存への道が究められなければならない。

このように、モノから心へ、対外競争から国際協調へ、という現代の課題を考察してきた結果、石附は、日本の教育はどうあるべきかという問題に對峙している。彼は、言う。異文化に対する正確な知識と理解を得させる工夫が必要であり、それぞれの地域に住む人びとの生活の実相を捉え、「文化」の違いに気づかせながら、人間としての普遍を確信し、それぞれの文化と生活の個性を尊重し、相互に親しみあうという協同の精神と態度の形成が不可欠であろうと。その土台として、当然ながら自らの文化への理解と誇りを、しっかりと教育するのである。自分たちの文化や国への確信なくして、他の国の文化や国、あるいは世界へのつながりも国際化もありえない。

これは結局、教育そのものの根本的使命であり課題でもある、自と他の独自性と個性を伸ばし、それを相互に尊重しあい、ともに協同の世界に生きようとする人間の形成こそ、教育の目ざすべき理念だからである。こうして、対外的な関係における日本の教育の課題は、その意味でも、内における問題の解決とも通じるのである。自己を相対化する力は、技術やモノだけに資する「知識」の教育からではなく、人間の感性と意志を育み伸ばす、真の意味での「知性」の教育によって初めてもたらされるものである。

4. 教育と旅

石附 実と言う。人間はもともと「旅する人」(ホモ・ヴィアトール *homo viator*) としての本質的特性をもち、目ざす目標に向かって、時と空間のなかで、ひたすら自らの歩を進めてきたのだ、と。また、洋の東西を問わず、人生を旅になぞらえ、人間を旅人と見る観念は強いとし、世界のいずれの宗教においても何かを求めての漂泊と流浪に旅が見られると指摘する。

西洋の中世になると、聖地巡礼やさまざまに移動する人びとは増え、この大移動の時代において、全ヨーロッパでは互いに情報の交流が進み、人と物の活発なコミュニケーションへの道が開かれる。それら人の移動のなかで、

とりわけ、学問教育を求めてヨーロッパの各地から、いくつかの主要な、いわば超民族的共同学習センターである、パリ、ボロニア、サレルノといった「中世大学」へと旅する学徒も多かったのである。

このような国際的・多文化共存的な性格をもつ大学では、出身、地域を異にする、民族や文化の差異を超えて、共通・普遍のレベルに立つ、という国際性と学問の府としての自治性を原理的支柱とした。これら研究と学習の国際的、自治的な学問の拠点を目ざして、各地から若者たちは苦勞を重ねながら遍歴の旅を続けたのである。

旅を教育に結びつける、というよりは、旅は教育の重要な要素であり柱である、とする考え方は、ルネサンスとともにますます強くなり、「旅はすぐれた学校」であり、「教育は旅によって完成する」と見る、いわば旅行教育論が登場する。ルネサンスを支えた人文主義（ヒューマニズム）は、つまるところ、人と世界を広く知り、文化の多様なことを理解することであり、多様な人・文化の共存のなかで、個性的、自主的に生きる人間の形成ということが大きな課題となった。人や文化が多様であることへの理解こそが、人間の正しいあり方をもたらすものであり、閉鎖的で内ばかり見ている視野の狭さから抜け出さなければならない。人間形成におけるこの開かれた「旅」へのいざないの系譜は、18世紀の啓蒙思想家J・J・ルソーへと引き継がれる。ルソーは『エミール』のなかで、「旅について」という項目において、教育を完成するものとしての旅への勧めを説いている。「世界という書物」の「観察」こそ大事であり、しかも「自分で見ること」が何より大切であると強調し、一国しか知らない者は、人間を知らないものであり、広く人間一般つまり、人と文化の普遍的本質を知るためにこそ旅が不可欠である、と考えた。この時代、教養を身につけようと若者たちがさかんに旅に出るようになり、初期的な大旅行（グランド・トゥア）の時代の幕開けとなった。特に、イギリス、フランス、ドイツなどの青年たちは、南欧とイタリアへと旅し、古典文化への見聞を広める一方で自分自身を発見した。やがて19世紀になると、これまでの一部のエリート層だけでなく、生活に多少余裕のある大衆レベルの世界

旅行（グローブ・トロッターズ）の時代に移っていく。

ところで、石附は、旅の教育的意義、つまり、旅を教育として考えたときそれが人間の形成にどのような意味をもつのかという点を考察し、4項目にまとめている。

- 1) 旅は、あくまで自分が思い立ち、決断して出発し、自主的、主体的に行なうものである。自律の行動こそ、旅の本質であり、自己学習つまり自学の過程にはほかならない。旅の個人性、主体性は教育としての大きな意義をもつ。
- 2) 旅は、他を知ることを通して、自らを省察するきっかけとなる。
- 3) 旅が、人を鍛えるということにおいて、その教育的意義は多大である。異境での危機や苦難を試練として、その経験が糧となって人は大きく成長してゆく。
- 4) 旅の最も大事な教育的意義は、途上にあることの自覚に資することである。学習の過程というものは果てしなく続くものであり、つねに、探求の途上、進行中なのであって、到達して終わりといった限界のないことを自覚する。いまだ道中の半ばにある、という自覚があるからこそ、なお先を求めて進み続けようとする意欲なり欲求も生まれる。そこでは、目ざすところのものへの「畏れ」の気持ちや知的謙虚さを不可欠とし、このような不完全、未成熟な者としての知的慎みの念こそが、知への旅に向けての本源的な活力になる。

石附も論述するように、今日の生涯学習の時代は、まさに知の旅の時代である。教育、学習の設計図はそれぞれ自らが描き、それを主体的、個性的に実践してゆくのもまた自分自身である。その旅を構想し、道中の歩みを進めてゆく力となるものは、途上にある者としての自らの慎みの自覚なのである。さらに、旅を実際の教育の場において大いに勧め、実践させることも、また、現代の教育を捉え直す象徴的な視点として「旅」を活かすのも、ともに、大事な課題であると結ぶ。

5. 旅の教育学

前章で石附 実が挙げた旅にみられる4つの教育的意義について論じたが、ここで要点を再度まとめる。自分で決断し、出かけるのが旅の大きな特徴、自主性である。次に探求性とは、旧来の日常的世界から新奇な非日常的世界に移ったときの、反省や奇異なものへの驚きと発見がもたらされるからである。次いで鍛錬性とは、旅によって人はさまざまな出会いや経験を行ない、それらを通して鍛えられるという意味である。旅の第4の特徴、途上性とは、旅が目ざす地点に向けて途中、道中にある、ひとつのプロセスであることをいう。そこから、石附は、旅する側の心性へと論を展開してゆく。途上にあるということは、いまだ目標に到達していないと自覚することであり、慎みと畏れの気持ちであると同時に何らかのものへのとらわれから自由になることを意味する。換言すれば、執着から離脱し、相対化の余裕をもつのである。拘ったり執着したりすることは、結局、既存のものや旧慣的なものにとらわれることでもあり、新しいものの創造を阻むことになる。

とらわれや執着から解放されて自由になることが旅の教育的な意義の一つであるが、石附はさらに、いわゆる「教養」というものの本性にも通じる、と論じる。彼に依れば、教養の本質とは、おきまりの思想や習慣への刺激、挑戦を通して、真の完全さを求めることにある。固定的な既成のものへの無条件的な屈従、すなわち、とらわれからの離脱が教養であり、それは、旅の途上性とも通低する、というのだ。そして、こだわりを去り独立人として生きること、そのために旅がその一つのあり方として理想とされている。

さらに、人間の本来的姿として、知に至る中間者的存在、それを探求する道半ば、過程（プロセス）に居ること、すなわち、旅の途上性を考えている。人間はまことに旅に生きる存在であり、特に教育にあつては、この途上性という旅の本性そのものともみなすことができる、とする。

現代の子どもたちは、テレビやインターネットなどにより、非現実的世界、抽象の虚構空間に親しむ結果、生身の感覚を通しての具体的な現実体験と認

識の力が弱くなってしまっている。そこにさまざまな現実経験の欠如からくる偏りの人格を招き、犯罪すら生まれる。また、現実の体験や感覚が希薄になることに関連して、他者とのつき合い方、コミュニケーションの取り方も不得手になり、自閉的、自分勝手の切り離された世界に閉じこもり、数々の問題も発生する。したがって、旅とくに外へ出かける人間の移動、遍歴は、現代教育にあって、不可欠の領域として、ますます重視、拡大されなければならない。

旅は、まさに人生にとってはもちろん、教育や学問において不可欠の視点となるものである。旅に出ることはもちろん大切であり価値はあるが、それとともに大事なものは、自己自身への旅の心をもつことである。教育において、もっと移動、流動、遍歴の精神を培い、また、そうした動きを活発にすると同時に、教育を旅そのものと考えすることも大切なのである。

フィールドワークFは、今年度初めての試みとしてカナダ・プリンスエドワード島への異文化研修の旅を催行した。今どきの学生気質そのままの学生との旅は、初めは観察から、途中は交じり合って、最後は大人（教師）の權威を保つべく叱ることもした。自由と放埒を区別できない未だ不完全な成人をみて、教育の不全と彼らの知的エネルギーの誤方向性を感じていた引率者であった。まだ間に合いそうだという希望があることがせめてもの慰みである。一教師としては、この研修旅行を挙行したおかげで、さらなる目標が見つかったという幸運を感謝しなければならないであろう。

後記) 帰国後筆者は、ひどい風邪を引いてしまい声がまともに出ないほどであった。後期授業が始まったときも、マイク片手に冷や汗ものの講義ぶりであった。しかし、しばらくしてカナダ組の学生たちが研究室を訪れるようになってから、不思議と軽症へと向かったのである。彼らは、一見軽い調子で話しているが、ちゃんと気配りをしながら話題を進めようとしているのである。第1回のオリエンテーション時に受けた印象とは明らかに違っていた。また、提出した研修レポートは、いわゆる書き言葉に変貌していて上手くま

とめていた。本当に成長したと思った。彼女たちは、異国の家庭で母国語も使えないながら寝食を共にすることによって、どれほど頭を遣い、気を揉んだことだろう。これらの体験こそ彼らの血肉となり、それぞれ大学院進学や長期留学を考えるという意欲へとつながったと言えよう。